

淨土教に於ける懺悔の研究

——特に善導を中心として——

平井 寛 雄

一 序 論

第一章 懺悔の語義と罪惡觀

第二章 懺悔の種類と其の方法

第三章 善導大師の出世と六時礼讃

第四章 善導大師の三心教及び二重深信

第五章 念仏行と懺悔

二 結 論

略 懺 悔

我昔所造諸惡業 皆由無始貪瞋癡

從身語意之所生 一切我今皆懺悔

序論に於て先づ懺悔を中心とした善導大師の往生礼讃をあつ如何に懺悔の道を明かしたか。

次に罪惡生死の凡夫に如何に教化すれば淨土往生出来るか。又念仏の尊さについて知る為には

淨土教に於ける懺悔の研究（平井）

導師の六時礼讃を研究する所に眞の懺悔が生じ懺悔を知ることには導師の礼讃を知ることにもなる。現在罪惡觀の薄くなつた時代に於て罪障を懺悔すべしと云ふことは最も佛教徒にとつて深く入らねばならない問題で、こゝに於て懺悔の尊さにつき広く民衆に伝えたい。こゝが動機でこの論文を作成したものである。

懺悔とは、過非を悔謝して其の惡意を誦うと云う意味で、若し自から犯あることを知つたならばすぐ深く自分を責め今後の犯を作らない様に能く根本の業を除滅すること、即ち惡に対する深い慚愧の反省で、本當に自分が惡かつたこと眞に心底から湧き出なくては罪を知つたことになるまい。全く自己の罪惡を意識することは自己をよく返り見る慚愧の反省である。例へば自分が罪を作り又戒を犯す時、皆なこの懺悔を用いる。何故か懺悔には常念の心がある。即ち名号には救罪生善の功徳を具足しているから、名号を称すると云ふことは自ら懺悔し行ふことになる。この事項については第一章と第五章に述べている。誰しも仏性「良心」がある限り人間は罪を犯せば非ず反省し懺悔する心が生ずる。此を常に唱える人こそ日常生活の中にある。こゝに感謝の生者が生れ大悲の老明に救われし。仏性があるのに何故迷つてゐるか。それには衆生起業すれども未だ救われぬのが五縛惡世である。結局凡夫は煩惱のある限り一生念仏を申さなければ救われぬ。罪々流転と云う事を考えた時、自分は極惡の罪人なり、こゝが仏の前に立つて自己の惡を振返つた時初めて何にか新しいめざめ、「大悲の老明」に照りこゝ、そして仏の前に表われ懺悔せしむる。即ち多くの罪を作つては懺悔によつて淨化せしむ善人え／＼と進展する。又自分があらゆる仏の前に立つた時、「ユルサレナイ罪」仏から見はなされ大罪は犯してはならない。こゝは無限の罪であつても、仏もこゝをよく知り給ふ。多く

の惡を意識して行動しては懺悔の価値がなくなる。人間は生れつき仏性がある、その為多大の罪を犯すが良心に返つてよく罪の懺悔をする。この懺悔こそ愈仏であり、その対象となるのは仏である。仏にすがつて助け給えと粟を除救させる。こゝに善眼されたのは善導大師の往生礼讃である。これはカニ三章と第四章に記している。大徳導師の六時礼讃は略懺悔の中に含まれ、餘法は出家あつても懺悔だけは法重に勤める事が出来る。死も望には礼讃、横には懺悔と云う組織にも考えられる。それ故に智昇へ大正四七・四六六頁へが諸經礼懺儀に收むるが、その意を看破つたからのことゝ思われる。但し智昇及び文の上からは往生の四の如く見えるが、導師の主義は無論正行の專修を仏を相續するため、の助行が礼讃で懺悔はその一種の附法であることは云うまでもない。それでは懺悔はたゞの禮に附隨した法式とも云えようが懺悔こそたしかに導師の信仰の告白書でもある訳で、以上云うゑつた心持ちで淨土教に於ける懺悔の研究を解説したのである。

そこで特に台導を中心とした、カニ三章懺悔の種類と其の方法について記述して見よう。

第三章 懺悔の種類と其の方法

往生礼讃には、要・略・広及び上・中・下の三懺悔を説いている。要懺悔の文は日没礼讃の終りにある懺悔法の文で

至心ニ懺悔ス南無ニ懺悔ス十方ノ仏乃至懺悔回向発願シ已テ至心ニ帰命ス阿弥陀仏

の文である。これは懺悔、回向、発願の意味を簡單に現わしたもので、次の略懺悔に用いられたる五悔の中より勸請と隨喜とを除けるものである、今發願を表す言葉の中に、恒願一切修終

時と言う言葉がある。これは一切悔終の言葉で最も重要な意義を有するものと思われ。礼讃私記卷上^①に、この言葉を解して

念々生歎つ名ヲ爲一切一時々對々成時悔終と思ふ

と云う。一期の悔終に対する発願の大切なることは勿論であるが、その悔終は、我々の人生にあつて恒に最後まで彼方へ／＼と押しやらされて実感に入り来らざるものである。刹那の悔終こそ愈々に我々の現実となれる問題である。発願は何時までも人生の更感となつていなければならぬ。刹那の悔終を味い得るこそ、眞面上への勤めらるゝ念死念仏（勸修書四六）の人である。現実念々の生活の上に死を念じ仏を念ずる業張の生活こそ宗教的生活であり、勝感勝境悉現前の生活で、あらゆる環境を仏道修行の勝縁とすることの出来る生活である。

略懺悔の文は、中夜礼讃の終りに出する五悔の文である。五悔とは懺悔、勸請、追喜、回向、発願の五つであり、勸請等の四法も悉く懺悔の意地に仕して爲さるゝものであるから、總じて悔と名づけらるゝのである。抑も五悔のことは語義論に出て大乗階級の通説儀と云うべきである。五悔は竜樹菩薩の思想に胚胎し、天台大師の思想に受け継がれたものである。即ち竜樹の十住毘婆沙論^②には、六時の行法に懺悔、勸請、追喜、回向、（発願を缺く）を行うべきを示し、天台大師の法華三昧懺法^③には六時に修すべき懺悔の方規の下に此の五悔を明し殊に懺悔を明す下には六根の上に造る所の罪障を一一審かに挙げて懺悔せしめられている。

広懺悔の文は日中礼讃の終に挙げる所の敬台十方仏、乃至懺悔已至心帰命阿彌陀仏の文である。広とは広く仏、法、僧の三宝及び現在同門の大衆に向つて、過去及び現在の罪業を懺悔することであり、但し普遍には、華嚴至善賢門願品^④の所に出ている。

我昔所造諸惡業皆由無始貪瞋癡從身語意之所生一切致今皆懺悔

の懺悔の事を略懺悔と称している。教旨十方仏の文の後半は大方等陀羅尼圣咒^④十住毗婆沙論^⑤等に出ずる文によつてある。懺悔の深心を表わして餘蘊なき大さな意を持つ。殊に懺悔を表白し了つて、今日より始めて覆くはくは法界の衆生と共に、邪を捨て正に帰し、菩提を究し、慈心を以つて相向い、仏眼を以つて相有て、菩提まで眷屬し、眞の正知識と作て同じく所依陀羅尼に生じ乃至成仏せん。と誓へる如き信念は大乗仏教徒の理想を表わすに遺憾なしと云ふべきである。

懺悔は仏教道徳の東渡上重要な一つであつて、其の種類には布薩、自恣、三禮懺法、三品懺悔等がある。二川を簡單に説明すると

布薩 出衆の法には半月毎(十五日と二十九日或は三十日)に衆僧を集めて戒を説き聞かせ、半月内に犯した罪をば懺悔して咎を免じ罰を除く儀式を布薩と云う。又布薩はもと梵語 *Upasatha* が巴利 *Upasatha* に変じ梵語の原形を失つて *Parasatha* となる。又布薩は安居と共にもと尋常門教徒の行事で王舍城の諸外道梵志が月三時に集合をなし、衆人部り来りて問施し、老に知友となり飲食を供養するを見、瓶沙王が仏に勸めて制せしものにして、比丘は白衣に對して丕を説き白衣は比丘に食を施すことあり、もと月二回が次第に増して六育八育等となり、二川に八戒を結びつけたものである。

自恣 梵語鉢利刺拏 *Pravāṇa* の訳、巴梨語 *paṭṭana*、西域語 *agag-adhe*、又は鉢和蘭に作られる。満足又は喜悅の意味、或は隨意事とも訳す。安居の終る日、僧をして自己の罪過を説かしめ懺悔清淨にして自ら喜悅を生ずるを云う。仏の所制は毎年一夏九十日の間、

淨土教に於ける懺悔の研究(平井)

僧衆一所に集会して安居し、堅く戒律を持して其の行を改喪ならしめ、安居の終る日、自恣の人を送び其の人をして自己の罪過を説かしめ、以つて究竟懺悔清淨を得しむる。又此の七月十五日僧自恣の日飯食等を以つて十方の衆僧に供養せば其の功德廣大にして七世の父母并皆解脫を得る。夏安居（九十日）の末日同僧の者が互に見、聞、疑の三事に就いて犯した罪を告白し、此を懺悔する事を云う。

三種懺悔法 罪惡を懺悔する三種の方法である。

一作法懺 現定の作法により仏前に懺悔す

二取相懺 入定して懺悔の想を運び仏菩薩の末現して摩頂する如き瑞相を感得するのを相とするのも かくて性業即ち仏の禁制を待たず其の旨の罪惡を云う

三無生懺 正心端坐して無生無滅の眞相を觀じ無明煩惱を滅すること云う

三品懺悔 罪を懺悔するに三種ある。即ち往生礼讃⑤

懺悔有_二三品_一。上中下。上品懺悔者。身毛孔中血流。眼中血出者名_二上品懺悔_一。中品懺悔

者。徧身熱汗從_二毛孔_一出。眼中血流者名_二中品懺悔_一。徧身微熱。眼中淚出者名_二下品懺悔

或る時は約して三品の別を論ずることあり、所謂造罪と念を隔てずして懺悔の心を起すを上とし、時を隔てずして懺悔の心を起すを中とし、日を隔てずして懺悔の心を起すを下とし、此を念時日の三懺悔と稱している。①

最後に懺悔の方法について ②には正明利益に就罪増上縁のこと記述されている。

即如觀至下品上人生人一生具造十惡重罪其人得瘥破死還召知識教誡除惡一令即除滅五十億劫生死重罪即是現生滅罪增上緣。又如下品中生人一生具造佛法中罪破齋破戒食用仏法信

物不生懺悔其人得病斂死地獄衆火一時俱至過善知識慈說弥陀仏身相功德國土莊嚴罪人面已
即除八十億劫生死之罪地獄即滅亦是現生滅罪增上緣、又如下品下生人一生具造五逆極重之
罪至墮地獄受苦無窮罪人得病斂死過善知識教誡弥陀仏名十声於声々中除滅八十億劫生死重
罪此亦現生滅罪增上緣。

又若有人依觀經等盡造淨土莊嚴表日夜觀想聖地者現生念々除滅八十億劫生死之罪又依至盡
衆觀經聖地聖樓莊嚴者現生除滅無量億阿僧祇劫生死之罪又依華嚴衆聖觀經日夜觀想者現生念
々除滅五十億劫生死之罪又依至觀經想衆聖身觀々善勢至等觀現生於念々中除滅無量億劫生
死之罪如上所引並是現生滅罪增上緣等

行香或曰罪報を全く免れ、或は重報を耽じて堅微となるのである。又淨全四には問答五叙此の
一段では三問答して信勝の捐益及び懺悔の方法が明され、至心に懺悔し見仏滅罪する行儀を説
き、又同至を引いて三昧の行儀を別明し更に又、大衆至消竜品によつて懺悔至滅の方法を示し
後、學者は仏教によつて至心に懺悔する事を云い尚を在家の爲に別に木槌子一〇八を賣て常に
自から隨へ行住坐臥を向めず至心に鉢名念仏す此は煩惱障報障滅して現前し給うことを明して
いる。

結 論

懺悔は自覺の心がなければ其の人は一生涯惡人である。即ち懺悔の念が少ない人である。懺悔
即ち罪惡に對する反省で自己内心の覺性に立つて始めて自覺の心に表る。この覺醒こそ現在実
生活の上に於いて、最も重いものであり、共に喜ぶものである。如何なる生活も教えによつ
て修行するもので、必ず門々見佛となり淨土得生となる。又自らの内觀反省によつて誦うる時、

淨土教に於ける懺悔の研究（平井）

淨土教に於ける懺悔の研究（平井）

寂縁和合の法を母とし共に諸仏を師とし、眞に生きる眼を開き、不平等を去る事進んで何事も正道に生きようと努力する所に懺悔の価値が生ずる。こゝに指導大師も人々を救ひ懺悔を教化の根本資料に置かれて世の衆生を清度される。此の最も大切な教を受けついで人々が互いに弘讃と隨順の態度と動作とを持つて三業純正の境遇淨化の相互生活を得ることが出来るならば、そのまゝが生きる力である。正しく眞に生きる道は隨善の他仏生活を感謝し回向する。この眞実の生命に目覺めて衆生々法を樹立するものは、自他共に助け合い、強く正しく、明るく生きるのが人生の道理であり、懺悔の眞さを体得し今に玄く、淨土の莊嚴を讃歎する最も導一人である。結局、何時も懺悔する心持で日常生活を他仏の中に生かして行くべきである。以上を持つて淨土教に於ける懺悔の研究、特に指導を中心としての論文を終えたい。

（室員・四回生）

（あとことわり）

紙数が救さぬので、目次通りの全文を挙べる事が出来ませんでした。又随つて註釈もはばきました。